
短歌

正岡子規

いちのはつの花咲きいでゝ我が目には今年ばかりの春行かんとす

伊藤左千夫

牛飼が歌よむ時に世の中の新しき歌大いに起る

佐佐木信綱

春ここに生るる朝の日をうけて山河草木みな光あり

島木赤彦

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

北原白秋

青玉のしだれ花火のちりかかり消ゆる路上を君よいそがむ

与謝野晶子

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

石川啄木

さいはての駅に下り立ち

雪あかり

さびしき町にあゆみ入りにき

若山牧水

幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

木下利玄

牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ

三ヶ島霞子

色づきて一つみいでしくらんぼみれば幾つも葉かげに赤し

釈迢空

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり